

# 「17年目の秘密」

最終回スペシャル「それぞれの行く道」

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

谷島

春樹 (17)

中央高校全日制二年生  
姉、デザイン事務所事務員

竹中

倫子 (17)

アルバイト

山岸

利枝子 (17)

中央高校全日制二年生

友子 (45)

母、スナックのママ

あやめ (15)

妹、中学三年生

宮田

真由子 (17)

未婚の母  
娘、赤ん坊

藤原

深雪 (15)

亮の妹、中学三年生  
中央高校全日制二年生

川村

浩輔 (17)

中央高校定時制二年生

牧

和哉 (17)

滝雀学園高校二年生

貴幸 (48)

父、不動産会社社長

淑子 (45)

母、不動産会社副社長

永井

聡実 (17)

滝雀学園高校二年生

滋郎 (50)

父、会社員

冨美代 (50)

継母、専業主婦

悦子 (45)

実母、出版社編集長

松野

亜沙美 (31)

中央高校全日制教師

剛士 (17)

中央高校全日制二年生

奈々 (17)

中央高校全日制二年生

同級生

紗耶香 (17)

滝雀学園高校二年生

寺沢

隆三 (47)

喫茶店店長

飯塚

純平 (25)

真由子の元彼、会社員

戸倉

早苗 (43)

あやめの実母

1 喫茶店 “エテ・プランタン” ・店内

深刻な雰囲気の中、春樹、夏希、寺沢がテーブルを挟んで話している。

別のテーブル席から、難しい顔で様子を伺っている倫子、利枝子、真実を抱えた真由子、浩輔、和哉、聡実。

春樹「(寺沢に) 戸籍謄本を見たとき、まさか店長が、僕の父親だなんて思いたくもありませんでした。 ”寺沢隆三” っていうのは、偶然にも同姓同名であると信じたかったです」

夏希「昔、何があったんですか？」

寺沢「私は、当時ある工場に勤めていました。でもその工場が倒産したんです。職を失って家族とも上手くいかなかった私は、工場の社長を逆恨みして、殺害をしました。十年服役して、その間に妻と別れて、子どもたちとも会えなくなりました……」

倫子「その子どもたちって言うのが、春樹と

夏希ちゃん……」

寺沢「……」

夏希「……」

倫子「……」

春樹「人を二人も殺害した男を、父親だなんて思いたくありません。それに、あなたと離婚したあと、僕たちを捨てた母親も恨みます。母は、今どうしてるんですか？」

寺沢「……」

夏希「教えてください。私たちを捨てた母親は、今どこにいるんですか？」

寺沢「……もう、亡くなってる」

春樹「……」

夏希「……」

倫子「……」

寺沢「出所してからはしばらくして、妻の知り合いに会う機会があったんだ。その時間いたら、妻は私が逮捕されて二年後に、膵臓癌で亡くなったらしい。私はその時思った。自分たちの子どもは、どこで何をしてるんだろうって……。刑務所の中に十年いた間、

私は、例え離婚したとしても、妻や子どもたちがどんな暮らしをしているのか、それだけを心配してたんだ……」

春樹「……」

寺沢「でも、施設に入れられたことしか知らなくて、どこの施設に入っているのかも、調べようにも調べられなかった……。でも、一日たりとも、子どもたちのことを忘れた日はなかった……」

春樹「いつからですか、僕が、あなたの本当の息子だと、気づいたのは」

寺沢「確信はなかったが、もしかしたらと思ったのは、この店がオープンしてすぐ、春樹君が面接に来たときだよ」

春樹「そんな前からですか……」

寺沢「ああ」

## 2 同・事務室（回想）

寺沢が、春樹の履歴書を見ている。

寺沢の声「面影がどことなく、妻に似ていた。

まあ、似たような顔は三人いるというから、  
当てにはしないつもりだったが、履歴書を  
見て、可能性が高くなった。私は、娘と息  
子がいて、息子には春樹という名前をつけ  
たし、妻の旧姓は谷島だった。私だって、  
春樹君と同じで、同姓同名だって信じたか  
ったよ。それに、履歴書の緊急連絡先に書  
かれていたお姉さんの名前は夏希。間違い  
ないと思ったよ」

### 3 同場所（回想戻り）

夏希「……」

寺沢「夏希と春樹……。私の子どもたちの名  
前と全く同じだった。その時から、もう確  
信に変わったんだ」

春樹「そんなの、辛すぎますよ……」

倫子「……」

利枝子「……」

真由子「……」

浩輔「……」

和哉「……」

聡実「……」

寺沢「辛い思いをさせたことは、今でもずっと申し訳ないと思ってる」

春樹「母は、どうして僕たちを捨てたんですか？」

寺沢「私のせいで、離婚せざるを得なくなつたんだ。人殺しの妻になんて、なりたくなかつたんだろう。それに、子どもたちを、人殺しの子どもにはしたくなかつた。だから、仕方なく手放したんじゃないかな」

春樹「そんな綺麗事言わないでください……。どんな理由があつたにせよ、捨てたことに変わりはないでしょ」

寺沢「……」

春樹「申し訳ありませんけど、本日限りで、こちらを辞めさせていただきます。あなたの顔なんて、もう見たくもありません。父親だなんて、思いたくもないッ……」

と、涙をこらえながら飛び出していく。

倫子「春樹ッ……」

夏希「（寺沢に）私も、ハルと同じ気持ちです。私だって、自分たちを捨てた母親を憎みます。それに、いかなる理由にせよ人殺しをして、家庭を壊したあなたにも……」

寺沢「……」

夏希「父親だなんて認めません。今後一切、私もあなたとは関わらないつもりですから、そのつもりで」

と、憤然と出ていく。

倫子「夏希ちゃん……」

諦めたような顔で、事務室へ行く寺沢。

気まずそうな顔の利枝子、真由子、浩輔、和哉、聡実。

#### 4 道

浩輔と真由子が歩いている。

真由子「何か、大変なことになっちゃったね」

浩輔「うん……送別会どころじゃなくなっちゃったな」

真由子「これから、春樹、どうするんだらう  
……」

浩輔「どうだろうねえ……」

真由子「せっかく、本当のお父さんが分かつたのに、こんなことになるなんて……」

浩輔「一途な性格だからな、春樹は。多分、ずっと父親のことを恨むと思う。あのお店だって、辞めるって言ってるし、もう修復不可能だよ……」

難しい顔の真由子である。

5 スナック “友子” ・店内

利枝子が帰宅する。

利枝子「ただいま」

と、母屋から、友子の声がする。

友子「本気でそんなこと言ってるのッ……」

利枝子、慌てて母屋へ行く。

6 山岸家・あやめの部屋

利枝子が入ってくる。

友子とあやめが口論している。

利枝子「どうしたの？」

友子「あやめが、本当の母親のところに行くって言い出してるの」

あやめ「……」

利枝子「（友子に）母さん、あやめは、自分の意思で、本当の母親のところに行くって決めたんだよ。だったら、あやめの思う通りにしてやれば良いでしょ。最後ぐらい、あやめの好きなようにさせてあげようよ」

友子「あんたはやっぱり冷たいのよ。私が、どんな思いであやめを育ててきたか、あんたは全然分かってない」

利枝子「……」

あやめ「お姉ちゃんは悪くないの。ただ、私が出ていけば、お母さんとお姉ちゃん、親子水入らずになれるでしょ。だから出ていくの」

友子「あやめだって、うちの子でしょ……。今更何を言ってるのよ」

あやめ「お母さんがそうやって言ってくれ  
ると心強い。でも、結局は私たち他人だから  
さ……」

友子「あやめ……」

あやめ「もう来月の今頃には、推薦入試だつ  
て始まるの。まさかお母さんが迎えに来る  
なんて思わなかったら、この付近の高校を  
考えてたの。だから、進路は変えないつも  
り。交通機関使えば、何とでもなるんだか  
ら」

友子「あやめ、本気で……」

あやめ「一生会えなくなるわけじゃないの。  
いつだって、遊びにくるから」

黙ってしまふ友子。

冷静な顔の利枝子。

7 スナック “友子” ・店内

友子が、ヤケ酒を飲んでいる。

利枝子が出てくると、

利枝子「母さん、何飲んでるの。もう店開け

ないと」

友子「今日は臨時休業」

利枝子「母さんッ……」

友子「こんな店、もうたたもうかしら」

利枝子「何言ってるの……。この店は、亡くなった父さんと一生懸命頑張ってきた店じゃない」

友子「何が父さんよ。私たち家族を捨てて、早苗と一緒にになった男じゃない」

利枝子「……」

友子「利枝子とあやめ、二人の娘を育てるために、お父さんが亡くなってからも、私が女手一つで、この店をやってきたけど、あやめがいなくなるんだったら、無理して自営業することないでしょ……。パートでも始めれば、収入は安定するし、私と利枝子だけじゃあ、そんなにお金もかからないじゃない」

利枝子「（呆れたように）変なこと言わないでよ。お酒入ってるからって、いくら何で

も言い過ぎだよ」

友子「私は正気よ。あやめが、まさか自分を捨てた母親のもとへ行くなんて思わなかった」

利枝子「……」

友子「自分を捨てた親の元へ行くなんてどうかしてるわよ。普通だったら、そんな親なんか、顔も見たくないって思うでしょ」

利枝子「まあ、そうだね……」

× × ×

へフラツシユ

喫茶店 “エテ・プランタン” での春樹。

春樹「申し訳ありませんけど、本日限りで、こちらを辞めさせていただきます。あなたの顔なんて、もう見たくもありません。父親だなんて、思いたくもないッ……」

× × ×

利枝子「……」

友子「もう、あやめなんて知らないわよ……。  
最後は、人を踏みつけにして、人を馬鹿に

するところなんて、母親譲りね。やっぱり、

血は争えないわよ……」

利枝子「母さんッ……」

と、顔を伏せる友子。

利枝子「母さん」

と、友子の体を揺らすが、酔いが回って眠ってしまったている。

呆れ顔の利枝子。

タイトル

『最終回スペシャル』

それぞれの行く道』

8 牧家・和哉の部屋（夜）

和哉が、身の回りの荷物を整理している。

と、淑子が段ボール箱を持ってくると、淑子「これに、とりあえず片づける荷物だけでも詰めちゃって。あと二ヶ月あるって言っても、いろいろやっていると二ヶ月なんて

あつという間だからね。あと、ちゃんと何が入ってるか、ペンか何かで書いといてよ。何の荷物か分からなくなっちゃうから」

和哉「分かってるよ」

淑子「学校のこともあるかもしれないけど、

荷物、なるべく早めに整理してちょうだい

ね（と出ていく）」

和哉「（嫌々）はいはい」

と、机の引き出しの整理を始めようと、引き出しを引くと、遊園地に出かけたときに撮った、聡実との写真が出てくる。

和哉「聡実……」

## 9 永井家・聡実の部屋

携帯電話で撮った写真を見ている聡実

——和哉が映った写真が何枚もあり、

一枚一枚ゆつくりと見ていく。

聡実「和哉君……」

10 アパート・谷島家・居間

布団を敷いて、横になっている春樹、  
倫子、夏希。

倫子「これからどうするの……？」

春樹「どうするって？」

倫子「せっかくお父さんが見つかったんだよ。

なのに、このままで良いの？」

夏希「私たちには、親なんていないんだよ。

昔からそうだったんだから」

倫子「夏希ちゃん……」

春樹「そうだよ。俺たちには、始めから親な  
んていなかった」

夏希「私たちを育ててくれたのは、〃ひまわ  
り園〃の先生たちなんだから。ねえ、春樹」

春樹「うん」

倫子「本当に、和解するつもりないんだね……」

春樹「当たり前でしょ。あんな人殺しを、ど  
うして親だって認めなきゃいけないの。俺  
たちが捨てられるきっかけを作ったよう

な人だよ。今更父親も何もないもんだわ」

難しい顔の倫子。

11 牧家・和哉の部屋（深夜）

ベッドで横になっている和哉——眠れないようで、ずっと目を開けている。

12 アパート・谷島家・居間

夏希と倫子は熟睡をしているが、春樹は眠れないらしく、何度も寝返りを打っている。

13 同場所（翌朝）

春樹、夏希、倫子が朝食を食べている。  
大きなあくびをする春樹。

倫子「眠たいの？」

春樹「まあね。昨日、あんまり眠れなかったから」

夏希「まだ気にしてるの？ あのこと」

春樹「……」

夏希「あんな男の人、もう忘れなよ。私たちとは関係のない人間なんだから」

春樹「そうだよね……」

と、ノック音がする。

倫子「私が出るわ」

と、玄関に向かう。

倫子の声「何ですか、あなたたちッ」

と、柄の悪い中年の男が二人、あがりこんでくる。

春樹「何の用ですか？」

男A「(夏希を見て) おい、俺たちに内緒で店辞めるなんて、どういうつもりだよッ」

夏希「お願いします。もう少しだけ、待ってください。今は余裕が……」

男B「うるせえッ。散々兄貴に貢がせて、挙句金も借りてるのに、無言で姿を消すなんて、いくらなんでも筋違いじゃねえのか」

夏希「……」

男A「払えないんだったら、方法はただ一つ。お前の体で払ってもらうしかねえよな」

と、夏希を連れ出そうとする。

春樹「姉に何するんですかッ」

と、男Aに掴みかかる。

男A「ガキは引っ込んでろ（と春樹を突き飛ばす）」

倫子「春樹、大丈夫……」

春樹、勢いをつけて男Aを突き飛ばす。

男A「何するんだよッ」

男B「このガキは……」

男B、春樹を殴る。

倫子、フライパンで男Bの後頭部を殴る。

男B「くっそー……。何しやがるんだ」

男A「まあ待て。（と倫子を見ると）夏希よ、こいつのほうが価値はありそうだな」

倫子「私をどうするつもりですか」

男A「決まってるだろ。夏希の代わりに働いてもらうんだよ。来いッ」

と、倫子の手を掴む。

倫子、手を振り払うと、

倫子「冗談じゃない。誰があんたみたいな男のために、働かなきゃいけないんですか」

男A「何だと？」

春樹「言つときますけど、彼女、まだ十七歳なんですよ。未成年の少女を、如何わしいお店で働かせたら、あなたたちのほうが危ないんじゃないんですか？」

男A「（諦めたように）じゃあ、俺たちにそのまま帰れて言いたいのか。そうは問屋が卸さないぞ」

春樹「返済期限を少し待ってもらっただけで良いじゃありませんか」

男B「バカだな。俺たちはな、せめて利息が重ならないように、こうしてわざわざ来てやってるんだぞ。なのに、何の礼もなく追いついていうのは、おかしい話じゃないか」

春樹「……」

と、寺沢の声がする。

寺沢の声「もう、その辺りにしたらどうです

か？」

ハッと振り向く春樹、倫子、夏希――  
寺沢が立っている。

春樹「店長……」

寺沢「話は聞かせてもらいました」

男A「おたくは？」

寺沢「夏希の父親です」

男A「父親はいないって聞いてたが」

寺沢「それは、お金を稼ぐための口実です。

こうして、父親である私がいるんですから」

夏希「……」

春樹「……」

倫子「……」

寺沢「借金、いくらぐらいあるんですか？」

男B「利息込みで、百五十万だ」

寺沢、鞆から小切手を取り出し、数字  
を記入すると、男Aに渡す。

寺沢「これで、何の問題もないでしょ」

男A「まあ、払ってくれたら良しとしましよ  
う。(と夏希に) 父親に感謝するんだな」

夏希「……」

男A「(男Bに)行くぞ」

男B「はい」

と、出ていく。

倫子「どうして、ここへ」

寺沢「子どもたちと、もう一度話し合いたい  
と思っただよ。そしたら、あんな光景に  
遭遇して……」

夏希「借金を肩代わりしてくれたことは、感  
謝します。でも、だからといって、あなた  
を父親と認めるわけにはいきません」  
春樹「姉ちゃん。せつかくいらしたんだ。じ  
つくり話し合おうよ。ちょうど良い機会だ  
と思うよ」

夏希「……」

倫子「……」

寺沢「……」

寺沢を見つめている春樹。

×

×

×

倫子が、寺沢にお茶を出す。

夏希「（春樹に）今更この人と話し合って何になるの。時間の無駄じゃない」

寺沢「……」

春樹「確かに、俺はこの人を、父親だなんて認めたくない。人を殺して、家族の幸せを壊したような人だからね。けど、一つ思ったことがあるの。（と寺沢に）俺はこれまで、姉ちゃんと倫子だけを本当の家族だと思ってきました。俺と交流を持ってくれる友達だって、俺にとっては家族も同然の大切な人だと思ってます。養護施設に入ってたなかったら、そんな感情持たなかったのかもしれない」

夏希「ハル、まさか養護施設に入ったことが良いことだと思ってるの？」

春樹「姉ちゃんは、そうは思わないの？」

夏希「え……？」

春樹「養護施設に入らなかつたら、倫子に会うことも、薫先生に会うこともなかったんだよ」

夏希「綺麗事言わないでよ……。言葉なんか  
いくらでも騙せるじゃない。私たちのこと  
を忘れた日は一日もないなんて言葉に騙  
されないからね」

倫子「……」

寺沢「……」

春樹「俺だって、同じ気持ちだった。けど、  
説得力があるかどうか分からないけど、店  
長が俺たちのことをちゃんと覚えていた  
っていう証拠みたいなものは見つけたん  
だよ」

寺沢「……」

倫子「何？」

春樹「あのお店の名前ですよ」

寺沢「気づいてたのか……」

春樹「ええ」

夏希「どういうこと？」

春樹「あの喫茶店の名前、姉ちゃん覚えてる」  
夏希「“エテ・プランタン”でしょ。それが  
どうかしたの？」

春樹「「エテ・プランタン」の「エテ」は、フランス語で「夏」って意味で、「エテ・プランタン」の「プランタン」は、フランス語で「春」って意味なんだよ」

夏希「……」

春樹「日本語に直すと、「夏と春」。つまり、俺たちのことを現してたんだよ」

寺沢、涙を堪えて、強く拳を握る――  
夏希の目にも涙が浮かんでいる。

夏希「そんなことで……」

春樹「……」

夏希「（寺沢に） どうして……どうしてもつと早くに、父親だって名乗らなかつたんですか？ 目の前に、生き別れになった娘と息子がいるのに、どうして平気でいられたんですか？」

寺沢「私だって辛かった。私は、前科者だ。そんな男が父親だったら、絶対拒絶するはずだろ。怖かつたんだよ。せつかく子どもたちに会えたのに、真実を知ったら、私の

前からは姿を消すと思ったんだ。父親だと名乗らなくても、遠くでずっと、子どもたちのことを見守っていけたら、それで十分だったんだよ。でも、真実を知ってしまったからには、もう逃げも隠れもできなかつたんだ……」

春樹、必死で涙を堪えている。

寺沢「君たちにとっての、この十七年間は辛いことばかりだったかもしれない。でも、まだ時間は取り戻せると思うんだ」

春樹「……」

寺沢「人生、やり直しができるような仕組みになっってると思うんだよ。こんなこと、口では何とでも言えるって思うかもしれないけどね、私は本気で、もう一度家族をやり直したいんだ」

春樹「……」

夏希「……」

倫子「……」

寺沢「この通りだッ（と土下座をする）」

難しい顔でお互いの顔を見つめ合う春

樹と夏希。

倫子「春樹も夏希ちゃんも、もう許してあげ

たら？」

春樹「倫子……」

倫子「(寺沢に) 頭をあげてください」

頭を上げない寺沢。

倫子「春樹、夏希ちゃん。私には、もう家族

はいない。私の家族は亡くなってから、

どこの世界を探しても、絶対には見つから

ない。だけど春樹や夏希ちゃんには、こう

して、今日の前に、お父さんと呼べる人が

いるんだよ。なのに、父親として認めない

なんてこと言ったら、家族がない私には

贅沢だと思うよ」

春樹「……」

夏希「……」

倫子「確かに、本当の親元にいることが、真

の幸せとは一概には言えないかもしれな

い。けど、十七年の歳月を経て、やっと疎

遠になってた親と子が再会したんだよ。家族の縁は、私たちの見えないところで、ちやんとつながってたんじゃないのかな」

春樹「……」

夏希の目から、涙がゆつくりと零れ落ちる。

春樹「姉ちゃん……」

倫子「許してあげようよ、お父さんのこと……。春樹だって夏希ちゃんだって、結局認めたくないって口では言っても、内心では嬉しいんじゃないの？」

春樹「お店の名前に、俺たちの名前をつけてたのは、ずるいなあ……」

倫子「夏希ちゃんの借金を肩代わりしたのは、どうして？ 恩に着せたいために、百万もの大金、代わりに返したりする？ 本当に娘が可愛いくて大事だって思うから、尻拭いだってしたんでしょ。春樹だって、初めてのバイトなのに、ずっと応援してくれたのは、息子にもっと頑張ってほしいってい

う思いがあったからだと思うよ。普通喫茶店のバイトって、結構重労働だから、合わない人には合わなくて、責任者との折り合いが悪くなるって聞くよ。でも春樹は、むしろ喜ばれたでしょ。それって、春樹のことを大事だと思ってるからできることだしよ。夏希ちゃんや春樹の気持ちを納得させるためには、余程のことをしないとできないって自分で分かっているんだよ、お父さんは。子どもに悲しい思いをさせたっていう大きな罪を背負っていることを自分で分かっているんだよ。夏希ちゃんの借金返済も、春樹を応援してるのも、罪滅ぼしなんだよ。子どもだったら、父親の気持ちぐらい、察してあげようよ……」

春樹、涙目になって、寺沢を見つめる。

寺沢「……」

春樹「父さん……」

ハツとなる寺沢。

春樹「父さん……（と寺沢に抱きつく）」

夏希「お父さん……（と寺沢に抱きつく）」

寺沢「本当に……本当にすまなかった……。  
ありがとう、俺の子どもに産まれてきてく  
れて……」

倫子、涙を堪えるように微笑んでいる。

14 永井家・居間（夜）

風呂上りの聡実が、髪を拭きながら入  
ってくる。

と、テーブルを挟んで、滋郎と富美代  
が深刻な顔で話し合っている。

滋郎「富美代、お前本気なんだな」

富美代「ええ……。この間から、そうやって  
言ってるでしょ」

滋郎「何が気に入らないんだ。何か、不満で  
もあるんだろう」

富美代「違うわ。ただ、自分は専業主婦にも、  
聡実ちゃんの母親にもなれないってこと  
が分かったから……」

聡実「……」

滋郎「聡実が、母親として認めないからか」

富美代「元々、認めてもらえるわけないって思ってたから、それは良いの。でも、一家の主婦としての気配りが、全然欠けてることに気がついたの。この間の聡実ちゃんのこと、悦子さんがここに来たとき、私、聡実ちゃんのこと、何にも不審に思わなかったし、聡実ちゃんに好きな子がいるのも知らなかった。いざとなったら離れ離れになった後でも娘のことを心配するついで、あの悦子さんの母親になっている姿を見て、私には悦子さんみたいにはなれないって確信したから」

滋郎「（冷静に）悦子は悦子。君は君だ。比べることはないだろう」

富美代「嫌でも比べちゃうのよ。やっぱり、あなたには私より悦子さんのほうが合ってるの」

滋郎「……」

富美代、鞆から紙を出し、広げる――

離婚届である。

聡実「……」

滋郎「……」

富美代「もう、あとはあなたの判だけです」

滋郎「……」

富美代「お願いします」

と、出ていく。

聡実「(滋郎に) 父さん」

滋郎「なんだ」

聡実「私も、富美代さんと同じ考えだよ。やっぱり、母さんとのほうが合ってる。富美

代さんは、父さんには合わないと思う」

滋郎「お前に、夫婦の何が分かるんだよ」

聡実「口喧嘩して、お互い遠慮もなく言いたい放題言っつて、挙句離婚届に、何のためらいもなくサインした、父さんや母さんの姿、はつきり覚えてる」

滋郎「……」

聡実「お姉ちゃん、そんな姿見て、悲しかったと思う。私も、悲しかった」

滋郎「……」

聡実「毎日お姉ちゃんの墓参りに行ってるお父さんなら分かるでしょ。お姉ちゃんの気持ち持ちが。富美代さんだって、自分の立場を分かっているの。だから、離婚を切り出したんだよ」

滋郎「……」

聡実「もう一度、母さんとやり直して。これは、富美代さんがくれた、チャンスなんだよ」

腑に落ちない顔の滋郎である。

15 中央高校・全景（一ヶ月後）

16 同・二年A組教室

春樹、利枝子、亜沙美、剛士、奈々が昼食を食っている。

剛士「早いよなあ、もう今月末には二年生も終わりか」

奈々「一年あつという間だよね。どうしよう、

私たちが来月から三年生だよ」

利枝子「また、このメンバーで同じクラスになれたら良いね」

亜沙美「二分の一の確率だからね。こればかりは、私たちじゃあどうしようもできないからね」

春樹「この一年、本当にいろんなことあったよね。まるで、小説とかによくある、大きな事件が続くような生活だった気がする」

利枝子「そうだよ。春樹と亜沙美の事件もあつたり、亮君が亡くなつたり……」

しらけたように黙つてしまふ一同。

利枝子「あ、ごめん。悪気はないの」

春樹「分かつてるよ。もう済んだことだから。いろいろあつたけど、過去のことなんて良いじゃん。今というこの幸せな時間を過ごして、こうして楽しい生活を送れる、それだけで十分じゃない」

利枝子「そうだねッ」

ニコニコしている春樹。

と、松野が入ってくる。

松野「春樹。今日、時間あるか？」

春樹「今日は、大丈夫ですけど、何かありましたか？」

松野「臨時で、三者面談をすることにしたから、会議室に来てくれ。お父さんが、どうしても三者面談をしたいっておっしゃってるんだ」

春樹「父が……？」

亜沙美「ちよつと待ってよ、春樹って親いらないじゃないの？」

利枝子「春樹、もしかして話してなかったの？」

春樹「だって、また一から説明しなきゃいけないし、黙ってても分からないかなって思ってたから」

剛士「父親、見つかったのか？」

春樹「俺のバイト先の店長だった」

奈々「喫茶店の？」

春樹「うん……」

亜沙美「何、このドラマみたいな偶然」

春樹「世間は狭いってこと、実感したよ（と苦笑する）」

松野「とにかく、業後、会議室。頼んだぞ」  
春樹「はいッ」

## 17 墓地

花束を持った倫子が、亮の墓にやってくる——制服姿の深雪が来ており、手を合わせている。

倫子「深雪ちゃん……」

深雪「（倫子に気づくと）倫子先輩……」

倫子、深雪の制服のポケットに造花が入っていることに気が付く。

倫子「今日って……」

深雪「はい。卒業式だったんです。だから、お兄ちゃんに報告しに」

倫子「そっか。おめでとう」

深雪「ありがとうございます。本当は、お兄ちゃんにも、今日の晴れ姿、見せたかった

んですけどねえ……」

倫子「……」

深雪「見てくれてるかな、お兄ちゃん……」

倫子「絶対見てるよ、亮君は」

深雪「そうだと良いんですけどね」

倫子「進路は決まった？」

深雪「いえ、これからです。一般入試は、これからなので」

倫子「そっか。じゃあ、まだ油断できないね」

深雪「ええ。でも、絶対志望校、合格します。

その学校、検定合格率が高い商業高校なんですけど、そこで頑張って資格取って、両親の事務所を継げたらって思ってるんです」

倫子「深雪ちゃん、会計事務所継ぐんだ」

深雪「まだ先の話ですけどね」

倫子「そっか……。 (と墓に向かって) 亮君、また今度、ゆっくり来るね。 (と深雪に)

じゃ、行こうか」

深雪「(墓に向かって) じゃあね、また来る

から」

と、共に去っていく倫子と深雪。

18 中央高校・会議室

春樹と松野が、椅子に座って待っている――寺沢が駆け込んでくる。

寺沢「すみません、遅くなりました」

春樹「父さん、どういふつもりなんだよ。松野先生に時間取らせるようなこととして、自分が遅刻するなんて」

松野「良いんだよ、春樹」

寺沢「いや、突然のお願いで失礼とは思ってんですけど、春樹の今後のことですから（と座る）」

春樹「俺のこと？」

松野「春樹。お父様はね、春樹の進路のことを、ぜひ三者面談で一緒に話し合いたいとおっしゃってたんだぞ」

無言で寺沢を見る春樹。

寺沢「まだ、父親らしいことはしてやれない

んだ。今の学校生活のことや、今後の進路のことをもつと知るには、先生にお願いするのが一番だと思ったから」

春樹「そんな面倒なこと、しなくても良いのに……」

松野「春樹は、ずっと就職するって言ったんだけど、その意思は変わらないか？」

春樹「意思は変わりません。でも、ひとつ違うのは、就職希望先を見つけたことです」

松野「どこだ？」

春樹「（寺沢を見て）父が営む喫茶店、”エテ・プランタン”です」

寺沢「春樹……」

春樹「俺、父さんのお店を継ぐよ。そのためには、ちゃんと父親の背中っていうのを見て、自分自身が成長しないとできませんからね。これまで、親子らしいこと何一つしてこなかったんです。けど、まだ時間はたくさんあります。これから、父と息子の時間を、大事にしようと思います」

寺沢「春樹……」

松野「(寺沢に)お父様。どうやら、進路に  
関する不安は、ないようですね」

寺沢「そのようで(と苦笑する)」

微笑んで寺沢を見ている春樹。

19 永井家・居間(夜)

悦子が来ており、聡実、滋郎、富美代  
と話している。

悦子「じゃあ、富美代さんの気持ちに、変わ  
りはないのね」

富美代「はい」

滋郎「……」

聡実「……」

悦子「(滋郎に)あなたは、その富美代さん  
の意思を尊重しようっていう形で、折れた  
のね」

滋郎「ああ。俺と別れて、自分の好きなよう  
に生きるほうが、性に合ってるって富美代  
が言うから……」

富美代「あなたが、私のことを大切に思ってくれてることは嬉しいわよ。でも、私と一緒にになるよりかは、悦子さんと聡実ちゃん、元の家族に戻るほうが、あなたの幸せでもあると思うからよ」

滋郎「……」

悦子「でも、富美代さんは、まだこの人のことが好きなんでしょ」

富美代「……」

聡実「母さん、富美代さんがこの家を出ていくって言ってるんだったら、それで良いじゃない。ここは、私たちの家なんだから」

悦子「聡実は、富美代さんも、富美代さんと一緒にいるお父さんのことも、嫌なんですよ」

聡実「それは……」

悦子「（滋郎に）ねえ、あなた。私が聡実を引き取っちゃダメかしら？」

滋郎「悦子……」

聡実「母さん……」

悦子「ごめんけど、私、お父さんと復縁するつもりはないの。仕事のしすぎで家庭を疎かにしてたことは分かってる。だから、夫婦仲も悪くなるし、直実の異変にも気づいてあげられなかった。仕事は出来てても、家庭の母親としては失格だった。それは反省してる……。でも、お父さんには、今富美代さんっていう奥さんがいるでしょ。この居心地が悪いんだったら、私のところに来なさい。高校は遠くなるけど、電車やバスを使えばいけるでしょ。一年間の交通費ぐらい、お母さん出せる余裕はあるから」

聡実、難しい顔で滋郎を見る。

悦子「聡実は良い子ね。結局は、お父さんのことも心配になってるんだから」

聡実「だって、私にとっての父親は一人しかいないから……」

滋郎「……」

悦子「ここには、直実の仏壇もあるし、住み慣れた家だもんね。やっぱり、いざここを

離れようと思っても、離れられないじゃない  
「い」

黙ってしまおう聡実。

悦子「じゃあ、こうしよう。私とは、週一、  
もしくは二週に一回、どこかで会おう。私  
も、これからは聡実との時間を大事にする  
ために、仕事もセーブするから」

富美代「悦子さん……」

悦子「聡実は、あなたを母親としては認めて  
ない。だから、嫌な思いをすることだつて  
あるかもしれないけど、聡実のこと、これ  
からもよろしくお願いします。何かあつた  
ら、いつでも私に相談してください。力に  
なりますから」

聡実「母さん……」

悦子「私たちにとって、こういう暮らし方も  
ありなのかもしれないわ。ややこしい感じ  
になつてるけど、お互いの幸せのためには、  
少しの我慢も必要なのよ」

聡実「これが妥当なんだろうね……」

富美代「私は、どんなことをしても聡実ちゃん  
の母親にはなれない。でも、これからは  
一人の人間として、私に頼ってほしいわ」

聡実「……」

悦子「聡実、もっと素直になりなさいよ」

聡実「……ありがとうございます」

悦子「この子には、これからも手を焼くこと  
になりそうね。でも、そんなところが、聡  
実の可愛いところよ」

苦笑している聡実。

20 山岸家・あやめの部屋（数日後）

あやめが、荷物をまとめた旅行用バッ  
グを持って、部屋中を眺めている。

21 スナック「友子」・店内

早苗が、あやめを迎えに来ている。  
元気のない顔で、カウンターに座って  
いる友子。  
と、母屋からあやめが出てくる。

早苗「あやめ……」

あやめ「……」

早苗「大きくなつたね。これから、またお母さんと暮らそうね」

あやめ「うん……」

と、友子の様子を伺う——あやめと目を合わせようとしない友子。

あやめ「……」

と、利枝子が学校から帰宅する。

利枝子「ただいま。(とあやめと早苗を見る) 今日だったの……」

早苗「ええ。これまで、本当にあやめがお世話になりました。これからは、私が母親として、この子を育てますから」

利枝子「(早苗に) 本当に、あやめを育てていけるんですか」

早苗「え……?」

あやめ「……」

友子「……」

利枝子「あやめが好きな食べ物、何か知って

ますか？ このお店で、うちの母親が作るバターコーンなんですよ。母のオリジナルの味付けのバターコーンが大好きなんです。でも、あやめは野菜があんまり好きじゃないから、サラダに乗ってるコーンは食べないんです」

早苗「……」

あやめ「……」

利枝子「それに、朝はイチゴジャムを塗った食パンじゃなきゃダメで、目玉焼きは半熟じゃないと文句言うんです。そうやって、あやめの好みを一つ一つ見ていくには、何年もあやめを見ていかなきゃできないんですよ。あなたには、お店がありますよね。じゃあ、その間、あやめはどうするんですか？ 育てていくなんて、偉そうなこと言ってますけど、お店をやりながら、本当にあやめを育てられるんですか。あやめのこと、これから分かっていくつもりなんですか」

友子「利枝子ッ……」

利枝子「（あやめに）ねえ、あやめ。あやめは、自分が出ていけば、私とお母さんが親子水入らずになれるからって言ったけど、あやめはそれで良いの？ お店がどんなに夜遅くになっても、翌朝にはちゃんとあやめの好きなものを作ってくれて、弁当にはちゃんとあのバターコーンを入れてくれた母さんの元を離れて、一人でやっていけるの」

あやめ「……」

友子「……」

利枝子「もう、私たち一緒にいられなくなるんだよ。会える会えないの問題じゃない。一緒に暮らせなくなるんだよ。それでも良いのッ……？」

早苗「（利枝子に）変なこと焚き付けるのはやめてください。（とあやめに）さ、行きましょ」

と、手を握って出ていこうとする――

その手を振り払うあやめ。

早苗「あやめ……」

あやめ、泣きながら利枝子に抱きつく

と、

あやめ「お姉ちゃん……」

利枝子「……」

あやめ「私、今のお母さんと、お姉ちゃんと、

ずっと一緒にいたい……」

利枝子「あやめ……。良かった、あやめの正

直な気持ちが聞けて……」

寂しい顔の早苗。

友子「早苗」

早苗「……？」

友子「いつでも、遊びに来なさいよ」

早苗「友子ママ……」

友子「生みの母と、育ての母。二人も母親が

いるなんて、幸せよ、あやめは」

早苗、涙をこらえて、深々と友子に頭

を下げる。

幸せそうに、あやめを見つめる利枝子。

22 中央高校・全景（朝）

23 同・廊下

春樹と利枝子が歩いている。

春樹「へえ、あやめちゃん、残ることになつたんだ」

利枝子「うん……。私が、あやめを離したくなかったの」

春樹「あれほど嫌ってた妹なのにねえ。やっぱり、離れ離れになるような状況になると、妹の存在の大きさを実感するんじゃない？」

利枝子「確かに、それは言ってる。けど、やっぱり本当の母親以上に、私や、うちの母さんのほうが、あやめのことをよく知っているからね。何も、本当の母親がいるからって、自分を産んでくれた人の元で育たなきゃいけないなんて法律はないからね」

春樹「二人も母親がいるのは複雑だけど、暮

らしを考えると、実の母親と離れて暮らすより、やっぱり利枝子やお母さんと一緒に暮らすのが、あやめちゃんにとつての幸せなんだろうね」

利枝子「そうだね」

春樹「あ、話変わるけどさ、和哉のアメリカ行きまで、もうすぐなんだよね」

利枝子「もう一ヶ月もないはずだよ。聡実の話では、確か今週末に、最後のデートをするって言ってたけど」

春樹「最後になっちゃうんだね……。何だか切ない話だね」

寂しそうな顔の春樹。

## 24 水族館

聡実と和哉が、恋人つなぎで手を繋ぎながら、方々を歩いている。

聡実「（イルカを見て）ねえ、大きいね」

和哉「ほんとだ。じゃあ、写真撮るか」

聡実「うん」

と、イルカを背景にして、携帯電話で  
写真を撮る聡実と和哉。

聡実「今日が、最後のデートになるんだよね。  
もう、一週間もないんだから……」

和哉「そんなこと言うなよ。四日後には、送  
別会があるんだよ。その時だって、また会  
えるんだから」

聡実「うん……そうだね」

和哉「今日は、デートを楽しむことだけを考  
えよう。悲しいことは一切言わない」

聡実「うん」

#### 25 同場所（時間経過）

アシカショーを見ている和哉と聡実。

水しぶきが、観客席に跳ね飛ぶ。

聡実、鞆からハンカチを取り出すと、

和哉の顔に跳んだ水しぶきを吹く。

微笑み合う聡実と和哉。

#### 26 宮田家・居間（夜）

真由子が、真実のおむつを替えながら、

電話で話している。

真由子「そう。うちでやろうと思って。だって、私が真実を産んだときは、和哉の家でみんなでお祝いしたでしょ。だから、今度はうちでやってあげたいの。和哉の送別会、前にちょっと早いけどやるつもりだったけど、結局出来なかったでしょ。大丈夫だよ。その日だったら、お父さん当直でないから。うん、じゃあちゃんと和哉誘ってよ。その日の主人公は、和哉なんだからね。引越しの準備もあるかもしれないけど、絶対、和哉連れてきよ。聡実だからこそ頼めることなんだから。うん、じゃあね」

と、電話を切る。

27 同・表（数日後・夜）

買い物袋をぶら下げた春樹と倫子が、  
談笑しながらやってくる。

春樹、倫子、利枝子、真由子、浩輔、和哉、聡実が、テーブルで焼き焼きを囲んでいる。

ベビーベッドから、その様子を眺めている真実。

一同、ジュースの入ったコップを手にすると、

倫子「じゃあ、和哉のアメリカ行きを祝して……」

春樹「あ、ちよっと待ってッ」

利枝子「何、どうしたの」

春樹、鞆から何かを取り出す——亮の写真である。

浩輔「春樹……」

春樹「亮君のところに行って、事情話して、借りてきたの。せつかくみんな集まったのに、亮君がいないと、物足りないでしょ」

倫子「まあね」

春樹、微笑むと、亮の写真をテーブル

に置く。

真由子、台所から空のコップを持って  
くると、お茶を入れて、亮の写真のと  
なりの置く。

倫子「では改めて……」

と、インターホンが鳴る。

真由子「誰だろう、こんな時間に」

と、出て行く。

## 29 同・玄関

真由子が出てくる。

真由子「はい」

と、ドアを開ける——純平が立ってい  
る。

真由子「純平……」

純平「よう……」

真由子「何しに来たの？」

純平「お別れの挨拶に来たんだよ」

真由子「え……？」

純平「年末に親父が倒れたんだよ。脑梗塞で

半身不随になったから、お店や工場にも立  
てなくなったんだよ」

真由子「確か、酒屋さんだったよね。実家」

純平「そうだよ。その実家に、家族揃って帰  
ることになったんだよ」

真由子「じゃあ、まどかさんと光平君も一緒  
に？」

純平「ああ。結局俺たち、真由子に何のお詫  
びもできなかったことが、申し訳ないって  
思ってるんだ」

真由子「別にそんなこと望んでないよ。どん  
な理由があっても、真実が私の娘だってこ  
とに変わりはないでしょ」

純平「……」

居間から、春樹たちの笑い声が聞こえ  
てくる。

純平「楽しそうだな」

真由子「うん。私、今十分幸せで、楽しい生  
活送ってるから」

純平「真実の養育費のことなんだけど……」

真由子「そんなものいらないよ」

純平「……」

真由子「改めて決めたの。そういう面では、誰からも助けは受けないって。真実のことは、私一人で何とかしてみせる。それが、純平やまどかさんへの対抗心だと思ってるから」

純平「……」

真由子「まどかさんにも、そう伝えて」

純平「分かった……」

真由子「もう、二度と会うことないね。光平君に、さようならって伝えて。まどかさんにも」

純平「ああ……」

真由子「じゃあ、元気でね」

純平「真由子もな」

真由子「うん、さようなら」

純平「じゃあな」

と、ドアを閉める。

少々寂しい顔をしている真由子である

——深呼吸すると、居間に戻っていく。

30 同・居間

真由子が戻ってくる。

聡実「誰だったの？」

真由子「（苦笑して）よく分からない宗教の  
勧誘だった」

春樹「失礼だね、こんな時間にそんなことす  
るなんて（と笑う）」

真由子「本当だよね」

倫子「さて。やっと乾杯ができるね。じゃあ  
みんな、コップを持って」

コップを持つ一同。

倫子「じゃあ、乾杯ッ」

一同「乾杯ッ」

と、コップを鳴らし、ジュースを飲む。

利枝子「そろそろ鍋、良い頃じゃない」

真由子「じゃあ、みんなどんどん食べてこう」

と、それぞれすき焼きの肉や野菜など  
を、器によそって、食べていく。

× × ×

〈時間経過〉

利枝子が横になって、熟睡をしている。

真由子、カーデイガンを利用にかける。

真由子「利枝子、熟睡しちゃってるね」

春樹「さつきまであんなにうるさかったのにね。これじゃあ、真実ちゃんと利枝子、どつちが赤ちゃんだか分からないね（と笑う）」

和哉、立ち上がると、

和哉「ちよつと、コンビニ行ってくる。（と

聡実に）聡実も来てくれ」

聡実「分かった」

浩輔「あ、俺もコンビニで何か買おうかな」

春樹「浩輔（と目配せをする）」

浩輔「（悟ると）あ……、やっぱ良いや。別に急ぐわけじゃないし」

倫子「（和哉と聡実に）二人で行つといでよ。私たちのことは良いから」

和哉「じゃあ、行ってくる。(と聡美に)行くぞ」

聡実「うん」

と、出て行く和哉と聡実。

真由子「あの二人が、ゆっくり話し合えるのも、今日が最後かもね」

春樹「そりやそうでしょ。もう、あと三日しかないんだから……」

### 31 道

和哉と聡実が歩いている。

聡実「もう、アメリカ行っちゃうんだね……」

和哉「まだ先のことだって思ってたんだけどなあ……。もう明後日には発つんだよな」

聡実「……」

和哉「聡実……。実は、コンビニになんて行く用事ないんだよ」

聡実「え……」

和哉「どうしても、最後に聡実と二人つきりで話したかったから」

聡実「……」

32 宮田家・居間

春樹、倫子、真由子、浩輔が話している——まだ眠っている利枝子。

春樹「やっぱり良いもんだよね、こうやってみんなが集まるのって」

倫子「そうだね。こうやって、誰かと関わることで、一人ぼっちじゃないんだって、実感できるからね」

春樹「倫子は一人じゃないよ。倫子は、本当に俺たちの家族になるんだから」

真由子「どういうこと？」

倫子「春樹？」

春樹「俺、高校を卒業したら、正式にお父さんのほうに籍を入れることになったんだけど、倫子も、寺沢家の養女として、寺沢家の籍に入れたらどうかって、父さんにお願ひしてあるの」

真由子・浩輔「えッ……」

倫子「春樹……」

春樹「倫子は、俺の家族も同然でしょ。何だか、俺と姉ちゃんだけ、本当の父親に巡り合えたのに、倫子には家族がない。倫子の気持ちを考えると、父さんの養女にするのも、ありなんじゃないかなって思ったんだよね」

倫子「けど、私で良いの……」

春樹「逆に、俺や姉ちゃんと一緒に家族になるのは、嫌？」

倫子「(慌てて首を振って)嫌なわけじゃない。私は、旦那と別れて、いくら春樹たちと一緒になくても、本当の家族にはなれないって思ってた。でも、これで本当の家族になれるんだね」

春樹「じゃあ、賛成なんだね」

倫子「うんツ……。これから、よろしくお願  
いします」

浩輔「とうとう、春樹も倫子が、本当の家族になったんだ。やっぱり、家族がいると、

幸せになれるんだな。俺も、母親が入院したことを経験して、実感した」

真由子「私だって一緒だよ。真実がいてくれるから、幸せになれるの。純平とは、もう二度と会うこともないつもりで、縁切ったから。純平、実家のお父さんが倒れたから、家業だった酒屋を継ぐんだって。まどかさんや光平君と一緒に、実家のある福井に戻るの。だから、もう二度と会うことはないんだよね。今生の別れだと思う。お互いの幸せのために、これ以上関わりを持ちちゃいけないからね」

春樹「真由子……」

真由子「これからは、真実のために生きていく。真実は、私の全てだから。そりゃあ、一時は自殺未遂したこともあって、みんなにも迷惑かけた。でも、もう絶対にならない。これからは、命懸けて、真実を育ててく。それが、今一番、私がやりたいことなの」

倫子「私だって、やりたいことはあるよ」

浩輔「倫子は、何やりたいの？」

倫子「私、高校卒業認定試験受けて、大学に行きたいの。まあ、そのためには学費を稼ぐことから始めないといけないけどね」

春樹「倫子……？」

倫子「私、元々子どもが好きで、施設にいるときも小さい子の面倒見てたでしょ。だから、そういう仕事に就きたいって思ったの。前に春樹がお願いして、私たちがいた〃ひまわり園〃で住み込みで働くつもりだったけど、亮君が亡くなったあと、春樹を支えるのが、私が今一番しなきゃいけないことだと思って、住み込みの話は断ったでしょ。だから、ちゃんと勉強して、いずれは保育士っていう仕事に就くっていうのもありかなって考えたの。もっと勉強して、養護施設での仕事もできたら良いしね」

春樹「そうだったんだ。まあ、子どもたちを預かることは、責任の重い仕事だから、大卒行って、専門的な勉強をするのも良いか

もね。縁があつて、「ひまわり園」で働くことになったりでもしたら、薫先生だって喜ぶんじゃない？」

倫子「そうだね。薫先生に胸を張れるような保育士になるッ」

浩輔「春樹は？ 何かないの？」

春樹「俺は、あの喫茶店を継ぐことかな」

真由子「継ぐの、あのお店？」

春樹「だって、あのお店は、俺たちの象徴だもん。父さんと俺が最初に出会った喫茶店なんだ。ある意味、寺沢家の家族を結んでくれた、大事なお店だからね。父さんの代で潰したくないの。せつかく俺っていう子どもがいるんだから、俺にいずれは任せてもらえたらなって思う。それか、二号店とか、規模を広げたりさ、いくらでも手段はあるんだよね。未知の世界だからこそ、やってみたいっていう気持ち湧き出てくるのかもしれない」

真由子「良いことだね。みんな、これから更

なる目標があるんだもん。私だって、もつと真実の育て方について考えなきゃな」

浩輔「みんな夢や目標があるんだよな。俺も負けてられないよ」

倫子「浩輔は、何か目標とかあるの？」

浩輔「工場長になること」

真由子、プツと吹き出す。

浩輔「何がおかしいんだよ？」

真由子「だって、浩輔が工場長なんだもん」

春樹「良いんじゃないの？ 若手工場長が仕切る職場みたいなのがあっても。他にも、自分で下請けの工場みたいなのを建てたりさ、見る世界をちよつと変えたら、いろんなものが見えてくると思うよ」

浩輔「そうだよな。よし、工場長になるぞッ」

と、真実が泣き出す——その泣き声で、利枝子も起きる。

利枝子「何？」

真由子「真実が起きたの。多分、おむつ替えないといけないんだよ。ちよつと、おむつ

取ってくる」

と、出て行く。

倫子「利枝子は、何かしたいことあるの？」

利枝子「(寝ぼけて) え？」

春樹「まあ利枝子が一番したいことは、高校で青春らしい生活送ることぐらいじゃない」

浩輔「呑気だからね、利枝子は」

と、笑い合う春樹、倫子、浩輔。

寝ぼけて、混乱している利枝子。

### 33 公園

和哉と聡実が、ブランコに乗っている。

聡実「私、和哉君と付き合ったことで、いろ

んな目に遭ったよね……」

和哉「そうだったな。紗耶香に裏切られて、襲われたり、監禁されたり……。本当、散々な目に遭ったよな」

聡実「ごめんね。私と付き合ったばかりに、和哉君にも嫌な思いさせて……」

和哉「別に良いよ。どんな嫌な状況でも、聡実のことを守れたんだから」

聡実「ありがとう、和哉君……」

和哉「それに、悪いことばかりじゃないだろ。良いことや楽しいことだって、たくさんあったでしょ」

聡実「まあね。和哉君とは、いろんな思い出があったからね」

聡実の脳裏に、これまでの和哉との思い出がフラッシュで蘇る。

和哉「聡実。俺がアメリカに行ったあとも、頑張れよ。辛いことだってあるかもしれないけど、もう聡実は一人じゃない。支えてくれる人だっているんだから」

聡実「うん……」

和哉「別れの言葉は、言わないぞ。また、会えるんだから……」

聡実、ブランコから立ち上がると、先に帰ろうとする。

和哉、立ち上がって、聡実の腕をつか

むと、

和哉「聡実ッ……」

聡実「……」

和哉、聡実を強く抱きしめると、

和哉「アメリカに行っても、俺は絶対、聡実のことは忘れないからな」

聡実「……」

和哉「だから俺は、別れは言わない。アメリカに行ったからって、別れるわけじゃないんだから、俺たちは……」

聡実「……」

和哉「せっかくやり直したんだ。そう簡単に別れるわけないだろ」

聡実「和哉君……」

お互い見つめ合うと、キスをする聡実と和哉。

34 空港・全景

35 同・ロビー

ベンチに座っている和哉、貴幸、淑子。

貴幸「まだ、出発まで時間あるし、土産売場でも回るか」

淑子「（貴幸に）そうですね。（と和哉に）和哉は、どうする？」

和哉「俺は、良いよ」

淑子「そう。（と貴幸に）じゃあ、私たちが行きますか」

貴幸「そうだな。（と和哉に）和哉、荷物見ててくれ」

和哉「分かった」

と、去っていく貴幸と淑子。

和哉、鞆から携帯電話を取り出すと、写真を見る——宮田家で撮った春樹、倫子、利枝子、真由子、亮の遺影、浩輔、和哉、聡実が写った集合写真である。

その写真を見つめている和哉。

と、紗耶香の声がする。

紗耶香の声「和哉」

ハッと顔をあげる和哉。

紗耶香が立っている。

和哉「紗耶香……どうして」

紗耶香「聡実から聞いたの。今日、和哉がア

メリカに経つこと」

和哉「そっか」

紗耶香「今日、聡実は？」

和哉「来てないよ。辛くなるのが分かってる  
と思うから」

紗耶香「そっか……。聡実も辛いんだもんね  
……」

和哉「……」

紗耶香「和哉。これまで、本当にいろいろと  
ごめんなさい……。 (と頭を下げる)」

和哉「もう良いよ。済んだことなんだから」

紗耶香「……」

和哉「ただ、本当に許してもらい込んだったら、  
一つだけ条件がある」

紗耶香「何？」

和哉「聡実のこと、頼んだぞ」

紗耶香「和哉……」

和哉「これから、ずっと聡実と友達……いや、親友でいること。それが守れるんだったら、許してやる」

紗耶香「分かった。私、和哉の代わりにはなれないかもしれないけど、聡実が楽しい高校生活を送れるように、私が助けるから」

和哉「頼んだぞ、紗耶香」

紗耶香「うんッ……」

和哉「元気でな、紗耶香」

紗耶香「和哉も、元気でね」

和哉「ああ」

と、少し寂しそうな顔で微笑む。

36 飛行場を飛んでいく飛行機

37 空港・ターミナル

上空を飛んでいく飛行機を眺めている  
聡実——その目には涙が浮かんでいる。  
と、春樹の声が聞こえる。

春樹の声「やっぱり、来てたんだね」

聡実、ハッとなって振り返る。

寂しい顔をして春樹、倫子、利枝子、

真実を抱っこしている真由子、浩輔が

立っている。

聡実「みんな……」

倫子「私たちも、和哉と直接会うつもりだっ

たんだけど……」

浩輔「やっぱり辛くてさ……」

聡実「……」

利枝子「和哉に、可哀想なことさせちゃったかな」

真由子「和哉も、分かっていると思う。和哉だつて強がっても、本当は悲しいに決まっているんだから」

利枝子「そうだよね……」

聡実「……」

春樹「いつか、和哉だって日本に帰ってくるんだよ。その時は、みんなで迎えてあげようよ」

聡実「うん……そうだね……」

と、涙を拭く。

一同、聡実に寄り添うに集まる。

倫子「和哉はいなくなっちゃったけど、私たちもいるってこと、忘れないでよ」

聡実「うん……」

寂しそうな笑みを浮かべて聡実を見る  
春樹。

38 中央高校・全景（春）

39 中央高校・三年A組教室

春樹、利枝子、亜沙美、剛士、奈々が  
弁当を食べている。

春樹「俺たち、今年も同じクラスになって良かったね。このA組で、高校生活最後の思い出作らなきゃね」

と、頷く利枝子、亜沙美、剛士、奈々。

亜沙美「楽しかった高校生活、残り一年しか無いもんね」

利枝子がおかずをのどに詰まらせる

——慌てて胸を叩く。

春樹「利枝子、大丈夫……？」

と、慌てて水筒のお茶を利枝子に渡す

——お茶を飲む利枝子。

利枝子「はあ、死ぬかと思った」

と、笑い合う春樹、利枝子、亜沙美、

剛士、奈々。

和哉の声「みんな、元気にしてますか。アメ

リカは、日本とは全然空気が違うというの

を、初日から思い知らされました」

40 アパート・谷島家・居間

倫子が、「高校卒業認定試験」の参考

書を見ながら、勉強をしている。

和哉の声「日本人が少ない中で、アメリカの

人とコミュニケーションを取るのは結構

難しいものです」

41 宮田家・居間

真由子が、昼食の支度をしていると、  
真実が泣き出す——真実の元へ行き、  
抱き寄せて、あやしはじめる。

和哉の声「それに、日本とアメリカでは文化  
や風習も違います。少しでも、アメリカの  
生活に慣れていきたいです」

#### 42 工場

浩輔が、部品の入ったケースを運んで  
いる。

和哉の声「みんな、それぞれに頑張っている  
ことでしょう。俺も負けちゃいられません」

#### 43 滝雀学園高校・三年一組教室

聡実や紗耶香たちが授業を受けている。  
と、消しゴムを落とす聡実——紗耶香  
が拾い、微笑み合う。

和哉の声「不安なことだっただってあると思います  
が、それでも俺は、新しい異国の地で、頑  
張っていききたいと思います。みんなのこれ

からの成長を祈りながら、自分も成長できたら良いと思います。では、またいつか会いましょう」

44 喫茶店“エテ・プランタン”。店内

T 「三年後」

寺沢が厨房で料理を作っており、春樹が接客をしている。

寺沢「（春樹に）Aランチお願いします」

春樹「はいッ」

と、客席に持っていくと、

春樹「Aランチお待たせいたしました。ごゆっくりどうぞ」

と、夏希と倫子がやってくる。

春樹「いらっしやいませ。（と夏希たちを見ると）あれ、どうしたの、二人とも？」

夏希「なんだよじゃないよ、もう時間でしょ。

私が交代するから」

春樹「あれ、もうそんな時間」

倫子「早く準備してよ、春樹」

春樹 「分かったよ。(と寺沢に) 父さん、  
 じゃあ姉ちゃんと代わるね」

寺沢 「おお。早くしないと、もう時間だろ」  
 春樹 「うん」

と、夏希にエプロンを渡す。

夏希 「後のことは、任せて」

春樹 「じゃあ、お願いします(と笑う)」

#### 45 墓地

利枝子、真由子、浩輔が既に来ており、  
 亮の墓の前に立っている。

と、春樹と倫子がやってくる。

倫子 「お待たせ」

春樹 「ごめんね、遅くなって」

浩輔 「五分遅刻だよ」

春樹 「すっかり時間にうるさくなったね」

浩輔 「当たり前だよ、高校卒業して、やっと  
 仕事一筋になったんだから」

春樹 「それもそうだな」

倫子 「(真由子に) 今日、真実ちゃんは？」

真由子「今日、保育園のお友達のお母さんの

ところで預かってもらってるの」

倫子「保育園行ってるの？」

真由子「だって、今、年少さんだから」

利枝子「真実ちゃんも、もうそんなに大きくなっただ」

春樹「そりやそうだよ、あれから三年経つんだから。みんな、もうそれぞれ忙しくなってる、なかなか会えないんだもん。だから、今日こうやって顔を揃えるのも貴重なことだって思わなきゃ」

倫子「あとは聡実だけだね」

と、聡実が走ってくる。

聡実「ごめんね、遅くなって。ちよつと行くところがあつたから」

春樹「良いよ、俺も今来たところだから。さて、六人集まったし、そろそろ行きますか」

聡実「あ、ちよつと待って。もう一人いるの」  
いぶかしそうに聡実を見る一同。

聡実「（後ろに振り返り）和哉君ッ」

と、木の陰から和哉が姿を現す。

一同「和哉ッ……」

和哉「みんな、久しぶり」

春樹「久しぶりって……、和哉、アメリカに  
いるはずじゃ……」

和哉「帰ってきたんだよ、アメリカから」

倫子「どうして？」

和哉「やっぱり、俺には向いてなかったんだ  
よ、アメリカは。向こうの高校を卒業して  
から、父親と同じ会社で働いてただけど、  
どうもうまくいかないというか、アメリカ  
のやり方は合わないんだろうな。日本の暮  
らしのほうが、俺には合ってるって思った  
し」

春樹「なるほどねえ」

和哉「まあ、アメリカにいる間も無駄じゃな  
ったんだよ。おかげで、日本でやってみた  
いことを見つけたし」

利枝子「やりたいことって？」

和哉「アメリカで、広告のディレクターさん

と仲良くなつてね、その人の影響もあつて、  
広告の会社を作りたんだよ。そのために、  
もう一度勉強をし直して、大学に行つて、  
経営の勉強とか、マーケティングの勉強を  
したいと思つて」

真由子「へえ……。やっぱり、会社を作るつ  
ていう血は争えないんだね。頑張つて社長  
になつてよ。その時は、私も働かせてね」  
和哉「真由子に言われたからには、頑張らな  
いな」

浩輔「相変わらず関心するよ、和哉には」  
和哉「まあ、あの両親に育てられたからな」と  
笑う」

春樹「みんな、それぞれまた成長していくん  
だよ。これで、七人揃つたし、そろそろ  
行こうか」

と、亮の声がする。

亮の声「七人じゃないぞ」

ハッとする春樹。

亡くなったはずの亮が現れる——啞然

としている春樹。

亮「俺もちゃんと数えろよ。俺を含めて八人だ。忘れるなよ」

と、ゆっくり消えていく亮。

春樹「……」

利枝子「春樹？ どうしたの？」

春樹「いや……今、亮君がいたような気がして……」

倫子「まあ、亮君はここで眠ってるからね」

と、一同、亮の墓を見つめる。

春樹「亮君……」

と、亮の墓に手を乗せる。

倫子、利枝子、真由子、浩輔、和哉、  
聡実も、春樹の手の上に、自分の手を  
乗せていく。

一同、亮の墓を見つめる——それぞれ  
の脳裏に、亮との思い出が蘇る。

春樹「亮君。これからも、俺たちのこと、見  
守っててね」

と、手を離す春樹、倫子、利枝子、真

由子、浩輔、和哉、聡実。

春樹「じゃあ、行こうか」

一同「うん」

と、去っていく一同——春樹を先頭に歩いていく。

談笑しながら歩いていく春樹たち——その姿を、少し遠くから見守っているように見つめている亮の亡霊。

亮には気づかず、倫子たちと談笑しながら歩いていく春樹——その顔には、とても幸せそうな笑顔が浮かんでいる。

完